



岡山大学 ナノバイオ標的医療の 融合的創出拠点の形成

ICONT (Innovation Center Okayama for Nanobio-targeted Therapy)

岡
大
医学・医療の最前線
12

遺伝子治療でアジア連携

がんに対する革新的な医療の創造を中心に医学・医療の最前線についてシリーズで解説しています。大学での医学研究成果を社会・国民に還元して新医療を創造することは、医学研究者の一つの目的であり、実現すべき具体的な目標でもあります。医学の基礎研究を臨床につなぐ研

究をトランスレーショナル・リサーチ(橋渡し)研究、医師主導の探索的臨床研究を含むと言いますが、日本においてそのベクトルが大学から産業界での事業化に向けての橋渡しへと進みつつあり、前々回からはこの話題について解説しています。特に、岡山大学は遺伝子治療に関連する臨

床研究において日本をリードしています。遺伝子治療は開発事業化)リスクが高く、医師主導の探索的臨床研究を実施してその安全性と有効性を示さない限り、残念ながら既存の大手製薬企業が事業化に向けて実質的に支援ないし臨床開発を肩代わりしてくれないという状況はあり得ない

と思われる。そのため、大学と産業界との橋渡し役として、「大学発ベンチャー」が必須であり、岡山発ナノバイオ標的医療の臨床応用と世界展開を目指す「桃太郎源社」を今年8月に設立しました。

一般的に新しい医療の創造は、革新的シーズの開発、橋渡し研究、前臨床試験、探索的臨床研究、臨床治験(薬としての厚生省への承認申請のためのフェイズ・I・II・III試験)の各ステップに分けられます。以前は、これらのほぼすべてを

アジアスタディ岡山'07

～新医療創造における連携を目指して～

開催日時:平成19年9月18日(火) 13時00分～18時00分
開催場所:岡山国際交流センター 国際会議場

主催者:岡山大学ナノバイオ標的医療イノベーションセンター長 公文裕巳
岡山大学EPS寄附講座「新医療創造MOT講座」客員教授 巖 浩

招聘者: 文部科学省 科学技術・学術政策局 戦略官 生川 浩史 氏
経済産業省 中国経済産業局局長 浅野 茂隆 氏
内閣府 大臣官房審議官 科学技術・政策担当 大江田 憲治 氏
英国エデンバイオデザイン社CEO Crawford Brown 氏
香港中文大学 助教授 NG Chor Yin Maggie 氏
シンガポール国立大学 教授 Edmund J D Lee 氏
前中国医科学院院長、中華医学会副会長、中国工程院院士 BA De-nian (巴 徳年) 氏
早稲田大学大学院 教授 浅野 茂隆 氏
川崎医療福祉大学 教授 梶谷 文彦 氏
財団法人 ヒューマンサイエンス振興財団 理事長 下田 智久 氏
(挨拶、講演等順)

言語:日本語・英語同時通訳 参加者:110名



◀新医療創造における連携を目指して開催された「アジアスタディ岡山'07」

製薬企業が実施してきましたが、近年はその初期をベンチャー企業や大学が担当するようになっていきました。特に、バイオ製剤の開発に関して、初期の臨床治験までをベンチャーが担当する事例が世界的に増加しており、新医療創造についてのグローバルな視点での取り組みが喫緊の課題となっています。

今般、遺伝子治療分野において日本のリーディング研究機関である岡山大学が、医薬の臨床研究にとって今後注視すべきアジアにおける共同研究、共同開発の推進を期待して、日本では初めての開催となりました第9回世界華商大会の機会に、中国、香港、シンガポール、日本各国の医学・医療関係者を招聘して、新医療の創造における連携を目指して「アジアスタディ岡山'07」を9月18日に開催しました。

既に中国では世界初の遺伝子治療製剤「アデノウイルスベクター」でがん抑制遺伝子「p53」を発現する注射剤「Gendicine」が04年に発売され、05年には腫瘍しゅよう融解アデノウイルス(AD101)が認可されています。今後、遺伝子治療を含むバイオ製剤の分野においても、世界3極承認体制(日米欧ICJ)との刷り合せや連携の構築が

求められています。今回のシンポジウムで報告された香港におけるアジアでの広域共同研究の展開、シンガポールにおける国を挙げての臨床研究(治験)支援体制の構築、ならびに中国のスピーディーな承認体制と研究の展開には改めて目を見張るものがありました。日本からは、今年度策定された「革新的医薬品・医療機器創出のための5か年戦略」を中心に日本参加の世界同時開発を目指す取り組みが報告され、英国のクロフォード・ブラウン氏からもアジアスタディへの期待が寄せられました。

終わりに、「人種、遺伝的形質、文化、習慣が類似しており、距離的にも近く時差がないため、コミュニケーションの取りやすい日本との共同研究を望んでいる」という中国の巴氏の発言は最も印象的であり、本アジアスタディの意義と将来の方向性を示すものと言えます。今後、遺伝子治療をモデルとしてアジアでの広域臨床研究の実現に向けての意見交換を継続的に岡山で実施していくこととなり、次回が来年の6月に予定されました。



公文 裕巳 (岡山大学ナノバイオ標的医療イノベーションセンター長・泌尿器腫瘍学(腎臓)教授)